




1 作物

項目	作業内容
(1)麦の播種	<p>(今月の作業のポイント) (1)麦の播種 湿害対策、土壌の酸度矯正、播種量、播種深度、施肥量、</p> <p>11月は麦の播種時期である。本県が主産地の裸麦は近年の需要の高まりで生産拡大が急務となっており、面積拡大とともに安定多収栽培が望まれる。収量・品質を左右する栽培ポイントは、播種前後に集中しているため、次の事項に注意しながら播種する。</p> <p>ア 湿害対策 麦栽培で最も重要なのが湿害対策である。1か月予報(10月21日高松地方气象台発表)によると、11月の降水量は平年より多く、周期的な降雨が予報されており、播種前後の降雨で、出芽不良を起こすことが懸念されるため湿害対策には万全を期す。</p> <p>近年、播種適期の11月に降水量が多いため、播種時の湿害で作柄が悪い年が多くなっているが、十分な排水対策が出来ていれば湿害を軽減できたと思われる圃場も多く、排水対策の重要性が明らかになっている。</p> <p>麦を栽培する水田では、事前に本暗きょや弾丸暗きょ、心土破碎等の根本的な排水対策を行っておく。また、圃場周囲に幅・深さとも25～30cmの排水溝(額縁明きょ)の設置は降雨後の速やかな土壌乾燥に大きな効果がある。</p> <p>麦の播種前に何度も耕起し、播種時にも耕起する播種方法では、耕起後の降雨により、長い間土壌が過湿となって播種が出来ずに播種が遅れるだけでなく、排水性が悪いため播種後も湿害を受けやすくなる。砕土性が良い土壌や湿害を受けやすい地域では、湿害軽減のため播種前に何度も耕起しない方が良い。</p>  <p>写真1 排水対策の不備による湿害</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>播種後は、圃場周囲と2～3m間隔に深さ15～20cm（必ず耕起深より深くする）、幅30～35cmの排水溝（明きよ）を設置し、必ず圃場外まで導水路でつないで降雨水が圃場外へ排出されるようにする。なお、明きよを設置する場合に畝の肩部が中央より高くならないようにし、降雨後の表面排水を良くする。</p> <p>イ 土壌の酸度矯正</p> <p>麦は土壌の酸性に弱く、麦種の中でも裸麦は最も弱いので酸性度の高い土壌では生育不良をきたす。裸麦の適正pHは6～6.5で、石灰質資材の投入による酸度矯正を行う。</p> <p>稲麦体系の中で水稻作の事前施用という意味も含めて、比較的多くの養分補給の図れる資材の施用が良く、ケイ酸や鉄を含む資材が望ましい。10a当たり</p> <p>エンリッチ 40・100kg フェロケイカル・200kg ようりん・60～80kg 苦土石灰・150kg (10a当たり施用量)</p>  <p>写真2 酸性土壌（pH3）での裸麦の生育障害</p> <p>ウ 播種量</p> <p>麦の播種量は、播種期、播種様式、土壌条件等によって異なり、苗立数が極端に少なくなると収量が低下し、倒伏や雑草が繁茂しやすくなる。</p> <p>10a当たりの播種量の目安はドリル播栽培ではマンネンボシや小麦は8kg、全面全層播栽培ではマンネンボシや小麦は15kgで、ヒノデハダカは小粒なため両栽培法とも約1kg減して播種する。ただし、播種前に事前の耕起を行い、碎土が良い場合や浅く播種する場合は播種量を約2割減らし、粘質土壌や播種期が遅れた場合はやや多めにする。また、出芽・苗</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>立ち率は播種が遅れるほど低下するので、11月25日頃からは5日遅れる毎に1割増して播種するが、出芽数が過剰にならないようにする。また、播種の条間は収量や倒伏及び雑草防除等の面から狭い方が良いが、狭くする場合は播種量が多くならないように調整する必要がある。</p> <p>なお、m^2当たりの出芽・苗立数はドリル播栽培では150本、全面全層播栽培では200本を目標に播種量を決める。</p> <p>エ 播種深度</p> <p>播種位置が深いと発芽率が低下するばかりでなく、その後の生育も極端に悪くなるため、適正な播種深度で播種する。</p> <p>今年産麦は、収穫時の雨によって発芽勢がやや低下していることが懸念され、そのような麦を深播きすると発芽率が大幅に低下することがある。特に、本県主力品種のマンネンボシは深播きになると出芽が極端に悪くなるので、今年は特に播種深度の調整を入念に行う。</p> <p>全面全層播栽培では、1回耕の場合は施肥・播種後8～10cmに、2回耕では、はじめの耕起は10cm、播種後の耕起は5cm程度とする。ドリル播栽培は、耕起の深さは5～10cm（湿害の出やすい圃場では5cmの浅耕）とするが、播種深が4cm以上になると出芽が極端に悪くなるので、播種深2～3cmになるよう播種前に播種機を調整する。</p>  <p>写真3 深播きで生育不良になった麦</p> <p>オ 施肥量</p> <p>基肥は裸麦、小麦とも全面全層播で窒素・リン酸・加里それぞれ10a当たり7～9kg、ドリル播では窒素をやや減じて5～7kgとするが、過剰な施肥は過繁茂を助長し、倒伏や品質低下の要因となるので慎む。</p>